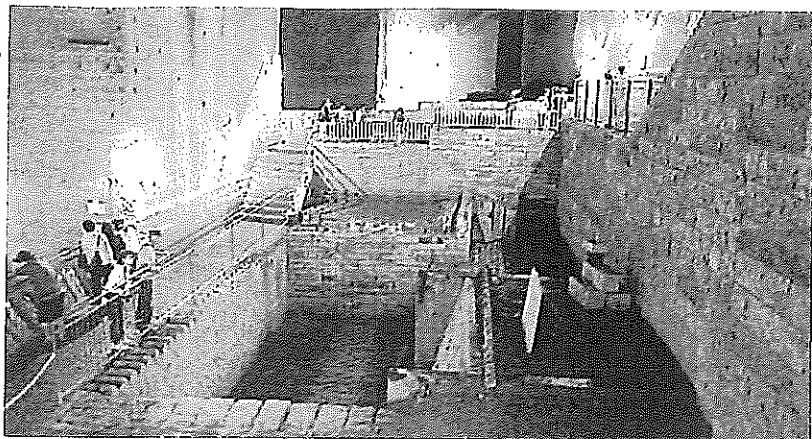


# 大谷 再生

日

## 「地下神殿」注目高まる

大谷石の産地で知られる宇都宮市の大谷地区が生まれ変わろうとしている。昨年の入り込み客数は50万人を超える見通しで、大規模陥没事故があった1990年代の水準まで戻りつつある。市は大谷地区の観光地としての魅力向上に取り組み専門部署を新設。宇都宮大学は大谷石の産業遺産を地域の活性化に結びつける研究を始めたほか、石材業界は新たな需要の掘り起こしを狙う。産学官による地区再生への動きを追った。

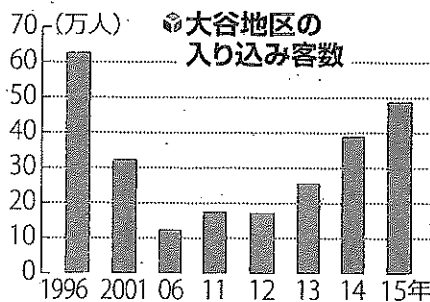


観光地として注目が高まる大谷石 採掘場跡(宇都宮市大谷町で)



### 宇都宮市 観光地化へ調査

大谷石採掘場跡 大谷資料館によると、1919年から86年にかけての採掘で生まれた地下空間。広さ約2万平方メートルで、野球場ほど。坑内の気温は年間を通じて8度前後。戦争中は軍の秘密工場として利用されたほか、戦後は政府米の貯蔵庫としても利用された。79年に大谷資料館が開館し、その後はコンサートや芸術作品展なども行われている。



好天に恵まれたゴールデンウィーク(GW)中、大谷資料館の駐車場はぎっしりと埋まり、東北や関西などのナンバーも目立った。埼玉県から訪れた会社員の春田千穂さん(26)は採掘場跡を見て、「巨大な地下神殿のよう。こんな神秘的な空間があったとは驚いた。非日常の世界を味わうことができた」と感激していた。

同市によると、同資料館、大谷寺、大谷公園にある平和観音など、大谷地区への入り込み客数は、1989年から相次いだ大規模陥没事故で急減した。その後、地震計の設置など安全対策を施し、ここ数年は増加傾向にある。

採石場跡が、映画やドラマなどの撮影に使われ、独特の景観が広く知られるようになったことが背景にある。市は「資料館や地底湖クルージングがインターネッットで広まり、イメージが向上した」と分析する。うつのみやシティガイド協会は昨年10月、大谷公園内の観光案内所を約11年ぶりに再開した。1日平均約4000~5000人、観光シーズンなどは約20000人の利用客があるという。協会の藤本由利子理事長(66)は「最近では、外国人の姿も目立ってきている」と話す。

市は今年度、都市魅力創造課に大谷振興室を新設した。国の地方創生推進交付金約1億1000万円を活用し、民間会社の協力を得ながら観光地化へ向けた大規模調査に乗り出す。

調査の柱に据えるのが、食べたり遊んだりできる新たな観光拠点の整備。資料館以外の採石場跡の地下空間を利用する方針で、地上では、大谷石造りの建物をサイクルステーションに改装したり、耕作放棄地に飲食物販スペースを設けたりすることも検討する。

観光客の滞在時間を延ばしてもらつたため、市北西部の観光拠点を結ぶ交通整備も進めている。今年のGWでは、大谷資料館と「道の駅うつのみや るまんちっく村」を結ぶシャトルバスを試験的に運行した。2021年春には東北自動車道の大谷パーキングエリアにスマートインターチェンジも新設される予定だ。

同市は、ホテル並みの設備やサービスを利用してキャンプを楽しむ「グランピング」施設の設置も模索する。採石場など特有の景観を楽しめる場所を選定する方針といい、同振興室担当者には「資料館など『点』への注目を、地区全体の『面』に広げていきたい」と話す。22年に県内で開かれる国体までの整備を目指している。